【学術論文】（査読あり）
京都工芸繊維大学学術報告書　第 13 巻（令和 2 年 12 月）
BULLETIN OF KYOTO INSTITUTE OF TECHNOLOGY　13（Dec. 2020）

詠嘆の「も」と挨拶語　－日本語の共在感覚－
The Ecological Approach to the Particle ‘Mo’ and Greetings in Japanese

澤田美恵子
Mieko SAWADA

京都工芸繊維大学　基盤科学系
Faculty of Arts and Sciences,
Kyoto Institute of Technology

E-mail：samieko@kit.ac.jp

（2020 年 7 月 29 日原稿受理　2020 年 10 月 6 日採用決定）

サマリー

本稿では、「私は今この人とともに何かをしている」という感覚を「共在感覚」と呼び、この感覚を呼び起こすような現代日本語の言葉を中心に分析を試みた。具体的には、現代日本語の「こんにちは」や「行ってきます」などの挨拶語と、日本語学においてもまだ完全には解き明かされていない「太郎ちゃんも大きくなったなぁ」などの文中で使用される詠嘆の「も」と呼ばれる助詞に着目し、話し手と聞き手が共有する環境への知覚をコミュニケーションの基盤として、話し手が現在や過去における共在感覚を聞き手に発話時に意識化させようと意図する表現であることを指摘した。「先日はありがとうございました」のような特別な表現を除く挨拶語の場合は発話時の時空間における共在感覚を、詠嘆の「も」の場合は過去における共在感覚を発話時の時空間の共在感覚と重ね、発話時の「今ここ」において、聞き手に過去の時空間を意識させることによって、話し手は協調的コミュニケーションに向かおうと意図していた。

こういった言語の使い方の基盤にあるコミュニケーションのあり方は、現代日本語だけの特別なものではないこと、Ecological Approach をとる Gibson, James Jerome や Neisser, U.などの視点から普遍的に妥当する可能性を有することを指摘した。

キーワード

共在感覚　詠嘆　も　挨拶語　認知言語学　エコロジカル・アプローチ

１．はじめに

ある晴れた冬の日、京都から東京へ向かう新幹線の二人席で、静岡駅を超え富士川を渡ったとき、富士山があまりに美しく立ち現われた。隣の西洋人らしい顔立ちの若い女性が日本語で「あ、きれい」と発話をした。独り言かもしれない彼女の言葉に対して、私はスマートフォンで富士山の写真をとりながら「本当にきれいですね」と返答した。彼女は、私が写真を撮る邪魔をしないように、笑顔で少しシートの方に身を引いた。それまで、新幹線の二人席というとても近い距離に居合わせながらも、一言も言葉を交えなかった二人の初めての会話であった。

私は、何か話をして会話を続けようかと考えたが、実際、彼女が会話したいのかもわからなかったので、結局話を交わしてしまったがために、その後の沈黙に少し気まずさを抱えながら、品川駅で彼女に会釈して降りた。もし、その日、富士山がきれいに見えなかったら、彼女は独り言かもしれない感嘆の発話をしなかっただろうし、私も返答することはなかっただろう。新幹線の二人席という空間では、ほとんどの場合日本人同士が隣り合わせても、見ず知らずの者同士であれば、一言も話さずに、二時間半という時間を過ごす。でも一度会話を交わしてしまったとたんに、その後は何か意識した関係になり、会話を交わす前と後では関係性が変わる。

木村(1996)[1]はアフリカ、ザィールの農耕民ボンガンド（Bongando）における「出会い」「挨拶」「一緒にいる」といった、身体や空間にかかわる日常的相互行為について考察し、次のように述べている。

> 挨拶はそれまで不確定であった両者の関係を、一定の枠にはめ込む。挨拶によって両者の関係が構造化されると、その間に相互作用（interaction）がおこる。相互作用といっても、その内実は情報伝達、言明、非言語的な交流など多様であるが、ただ共通にいえることは、そういった顕在的な相互作用のバックグラウンドとして、それに参与するものたちが「私は今この人とともに何かをしている」という「態度のモード」を共有していることである。私はそれを「共在感覚」という言葉で呼んだのである。(P. 329)

新幹線の隣席という身体が触れ合うぎりぎりのとても近い場所に居合わせ、隣席の人の動きを感じながらも、何かきっかけがない限り「何かをともにしている」という感覚を、ないことにして時間を過ごす。しかし最初にあげた例のように、「富士山が見えた」という事件をきっかけに、会話を交わすことによって、相手が写真を撮っていれば、邪魔にならないように身体を動かすという行動をとる。そこには「共在感覚」が働いている。

本稿では「私は今この人とともに何かをしている」という感覚を、木村（前掲）を踏襲して「共在感覚」と呼び、この感覚を呼び起こすような現代日本語の言葉を中心に分析を試みる。具体的には、挨拶語と、詠嘆の「も」と呼ばれる表現に着目し、言語によって共在感覚を意識化させようと意図する現代日本語の表現について考察する。

２．挨拶語

挨拶は人にとって普遍なものといえる。動物にも、出会ったとき挨拶が存在し、また人間社会で挨拶がない国はないと言われている。挨拶は「社会的なつながり」をつくる大切な相互行為なのである。挨拶の仕方は、文化によって異なり、同じ文化内でも親密さの度合いによっても異なるため、当該文化の母語母文化話者にとっては、無意識に使っているものであるが、母語母文化話者以外の

ものにとっては、言葉は簡単に使えても、その背景にある慣習や風習を知らないで使うと大きな間違いをすることがある。挨拶語を日常的に使っている人間にとって、字義通りの意味を意識化することが殆どないのは、挨拶語は、個人によって意味が紡がれた文ではないからである。挨拶語には、慣習として固定化された言葉が、伝承されたものゆえに、個人よりも言語を使う集団の社会的歴史的背景を担う文化が色濃く反映されると考えられる。

「こんにちは」という言葉は、日本において、家族に対して使うものではないし、毎日同じ空間で働いたり、過ごしたりする人にも使わない。恋人同士でも最初は会ったときに昼間であれば、「こんにちは」を使うかもしれないが、親しくなり一緒に過ごす時間が増えるほど、会った時に「こんにちは」と言われると距離を感じ違和感がのこる。

比嘉(1985:P.17)[2]は「日本人の家庭で「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」という基本的なあいさつの言葉がそれほど使われていないのとは対照的に、「行ってまいります」「行っていらっしゃい」「ただいま」「お帰りなさい」のような外出と帰宅のときのあいさつ言葉はひんぱんに使われている」と指摘する。

「行ってまいります」「行っていらっしゃい」「ただいま」「お帰りなさい」という言葉は生活空間をともにする人に使われる言葉で、日本人にとって「同じ空間にともにいる」ということを確認するのは、社会的つながりをつくるために重要なことと考えられる。大学の研究室においても、同室内のメンバー間では「ただいま」「おかえり」といった挨拶が使用されるが、異なる研究室に入るときには「失礼します」「お邪魔します」などを使われなければならない。

氏家(1999:P.76)[3]は、日本語社会について「ウチ・ソト区別の意識により集団の一員として自己を、また相手をみなす」と指摘する。日本語の挨拶語の考察から、同じ空間でともにいるか否かということが、日本語社会のウチ・ソト区別に有意味であることがわかる。

また、職場で一度「こんにちは」と言った人に、もう一度同日のうちに出会ったとしても「こんにちは」も「こんばんは」も使えず、会釈するか、そのまま会話を始めることになるだろう。すでにその日は「同じ空間にいる」ということが確認されているからである。反対に見知らぬ人に「こんにちは」と声をかける場合は選挙かセールスなど何か意図がある場合である。

日本語の「こんにちは」に相当する他の言語を比べてみると、言葉が直接表す意味としての興味深い違いに気づく。

(1) こんにちは

(2) Bonjour

(3) 你好

たとえば、日本語の「こんにちは」は文字通り「今日は」という意味で会話の場所である「今ここ」の環境を説明する冒頭の言葉である。まさに「こんにちは」は、同じ空間にいることを、ことさらに伝えるという意味をもともと持っているということになる。

フランス語の「こんにちは」にあたる (2) の意味は「良い一日を」と、神に聞き手の幸せを願うという原義をもち、聞き手に言葉の意味としても直接働きかけるものである。中国語においては(3)のように「你」は「あなた」という意味、「好」は「良い状態」という意味を表しており、挨拶言葉内に「聞き手」の状態を聞く言葉が入っていて、より直接的に聞き手に働きかける言葉である。また (3) は家族間や親しい人には使わず、その代わりに「你吃了嗎（ご飯食べた？)」や「你去哪裡（どこ行くの？)」が使われる。日本語の授業において、今まで何人かの中国人に聞いてきたが、皆同様に、実際にこの疑問の答えを知りたいというわけではなく、ただ会話を交わすことに意味があ

るのだという答えが返ってきた。おおむね中国語は、会話の最初から日本語やフランス語より聞き手の情報が求められ、挨拶においても一個人としての情報交換がなされていると言えるだろう。

日本語においては、(4)から(7)のような家族内や寮、研究室や職場のように同じ室内で過ごす人にも使うことができる挨拶も、(4)はまさに「ただ今」ということ、(5)は「帰り」ということ、(6)は「休み」ということ、(7)は「早い」ということを表しており、「お」という待遇表現が入っているが、基本的に発話時の話し手の目の前の状況を言明することが挨拶となっているのが日本語の特徴である。つまり、見れば大体わかることを、ことさらに言うもので、情報としてはほとんど意味がないものである。

(4) ただいま
(5) おかえり
(6) おやすみ
(7) おはよう

食事の前にいう言葉である(8)も、今から頂くという意味であり、その場に他に人がいなくても一人で発話することもある。その意味について意識的か否かいずれにしても、慣習化している言語である。

(8) いただきます
(9) Bon appétit

「いただきます」に相当する挨拶は中国語にもない。ヨーロッパ言語のフランス語やイタリア語、スペイン語には、これから食事をしようとする人に対して声掛けする挨拶はある。たとえばフランス語の場合は(9)のように“Bon appétit！”と言うが、これは食事を前にした人に「美味しい食事を」と祝福の意味をこめて発するものであり、一人で食事をする場合にも発する「いただきます」とは全く発話意図が異なる。「いただきます」は「もらう」の謙譲語で、「もらう」は複雑な意味構造の動詞である。何かをくれた相手を主語にするのではなく、自分または自分の視点がある主体を主語にして、何等かの利益が主語の方へと動いたことを表現する。この表現もまた他の言語にはあまりないもので「もらう」を一つの言葉に相当させて翻訳するのは難しい。謙譲語「いただく」は、自分または自分の側にあると思っている方を下方に位置づけ、恩恵をくれた相手に敬意を表す。食事の前に言う「いただきます」の場合だと、食事を作ってくれた人または奢ってくれる人に敬意を表す場合も多いが、自分で作って、一人で食べる前に言う人もいるだろう。このような場合の「いただきます」は誰に対して何に対して、自分を下方にして敬意を表しているのであろう。これは個人の習慣の問題ではあるが、食べるものに対して「いただきます」と言っている場合もあるだろう。この場合は食べるものに敬意を表してはいるが、結局食べられるものは「いただきます」と宣言した人間の口から取り込まれ、その身体の中で消化される。「いただきます」という言葉の意味を意識しているか、していないかに関わらず、宣言した人間が字義通りの意味で行動していることは間違いない。

このように、日本語はこれから自分がする行為を宣言する言葉が、そのまま挨拶になることがあるといえる。たとえば「行ってきます」も、これからする行為を宣言する言葉が挨拶となっている。日本語の挨拶語は、聞き手に直接働きかけ相手の情報を得るというよりも、話し手の「今ここ」の状況をことさらに言明することが多く、あまり新情報としては意味がなく、もっぱら同じ空間にいる人ということを認識し「社会的つながり」を確認していると言える。日本語を使ってコミュニケーションするとき、聞き手に対して、出会った最初から直接的には聞き手個人の情報を求めないで、

(10)のように、気候についての描写や感想から話を始めることが多く、それだけ話して別れることもよくある。

（10） A：こんにちは、寒いですね。

B：こんにちは、ほんとに寒いですね。

それは欧米語のように会話の冒頭で、「お元気ですか」と話しかけるより、日本では一般的にされているコミュニケーションであろう。挨拶という非常に基本的なコミュニケーションにおいて、日本語は、英語やフランス語、また中国語と異なり、話し手と聞き手がお互いの情報を交換しあうことから会話を始めるのではなく、「今ここにともに挨拶していること」「環境に対して同じような感覚をもっていること」を基盤にして、協調的なコミュニケーションをとろうとしていることがわかる。

３．環境の共有

アメリカの知覚心理学者、Gibson, James Jerome は生態学的心理学の立場から、動物の活動を動物とそれを取り囲んでいる環境との相互関係で捉え、知覚論を展開した。彼は次のように述べる（Gibson, James Jerome(1979:P.141)[4]）。

to perceive the world is to coperceive oneself

（世界を知覚することは自分自身を同時に知覚すること）

「世界を知覚することは自分自身を同時に知覚すること」というテーゼは、ある景色を見て「美しい」と言った時、その景色を美しいと感じ、同時に言語として表している自分自身をも知覚しているということである。また彼は次のように観察者としての人は、他の知覚者が知覚するものをも知覚できると述べている（Gibson, James Jerome(1982:p411)[5]）。

People are not only parts of the environment but also perceivers of the environment. Hence a given perceiver perceives other perceivers. And he also perceives what others perceive. In this way each observer is aware of a shared environment, one that is common to all observers, not just his environment.

（人は環境の一部であるだけでなく、環境の知覚者である。したがって観察者としての人は他の知覚者を知覚する。そしてまた他の知覚者が知覚するものを知覚する。このようにしてそれぞれの観察者は共有された環境、自分にとってだけの環境ではなく、すべての観察者に共有された環境を知覚するのである）

この指摘は、協調的な方向性をもつコミュニケーションを話し手と聞き手が互いに望む場合は、日本語の会話の冒頭である挨拶において話し手は「今ここ」を描写し、聞き手もまた同じ対象を見て環境を共有しているということをコミュニケーションの基礎にできるということを、普遍的な見地から説明している。

日本語の俳句は、５、７、５の３句１７音を定型とする短詩で、季語を入れることを原則としているが、このような短い詩を読んでその風景を感じることができるのも、「他の知覚者が知覚するものを知覚する」といった前提に支えられてコミュニケーションが成り立っていると考えられる。

（11）梅が香に　障子ひらけば　月夜哉

（11）は、小林一茶(1763-1827)が詠んだ春の俳句であるが、環境と言語、文化を共有する人であ

れば、月が美しい夜、障子の和室の中に月の光が差し込み、そこはかとなく梅の香りが漂ってくる世界をこの句からイメージすることができる。梅が咲いたかと障子を開けると月が夜空に輝いているというような情景が、時代が異なっても想像でき、ふと梅の香りまで思い出すことができるかもしれない。

さて現代でも会話の冒頭に季節の挨拶をくみかわすような人は、発話時の現在という時間、同じ空間にいて、環境への知覚を同じように感じていることを基盤に聞き手の共在感覚を喚起して協調的なコミュニケーションを取ろうとする。携帯電話で恋人同士が話している場合、例え実際的な距離が離れていても、満月を見上げて、「今日のお月さま、きれいだね」「本当にきれいだね」と話すことで心がつながっていると確認する場合もあるだろう。また日本では寿司屋や鉄板料理屋などカウンター越しに料理人のパフォーマンスを見ることができるレストランが、欧米や中国よりもともと多いが、こういった場では話し手と聞き手が横に並んで料理人の手際の良さや新鮮な材料などについて話すことができ、対面で話すより同じものを見ている分、共有する話材も豊富になり、話材に困らず円滑なコミュニケーションをしやすいからかもしれない。

こういった環境を題材として他者に働きかけようとする試みは言語表現のみならず、絵画でも意識されている。画家佐川晃司は「この世界、この時代に生きている限り、同じものを見て、同じ空気を吸い、同じことを考えている。素直に表現できれば、ほかの人にも感じてもらえる。共感や共鳴、信頼につながる（京都新聞朝刊 2016 年 2 月 20 日）」と述べる。

佐伯（2007:p.iv）[6]は、共感について「「他」（者でも、物でも、事でも）との関係を見いだし、関係をつくり、そして関係の中に生きることだ」と述べる。佐伯は赤ちゃんも視線を向けている「対象」を「ともに」見ようとするという共同注意ができるようになると、相手が行っている行為からその背後にある「目標」を推察し、今度は自分自身がその「目標」をもって相手の「やろうとしている」行為を自分もやってみようとするようになると考察する。また他者の行為の意図を理解し、その意図にふさわしいものとして他者の行為を真似ることを「深層模倣」と呼び、ただ形だけを真似る「表層模倣」と区別し、共感に必要なのは深層模倣であると指摘している。

このように日本語の挨拶語だけでなく、環境における共感や共在感覚をコミュニケーションの基盤と考えることは、普遍的に主張できるように思われる。

４．詠嘆の「も」

ここでは、現代日本語で日常的に使われている助詞「も」の用法の一つで、季節や時間を表すときに良く使われる詠嘆の「も」と呼ばれている用法から共在感覚を喚起して協調的なコミュニケーションを取ろうとする場合について考察してみたい。

「も」には大きく分けて３つの用法がある。

（12）太郎も来た。

（13）猿も木から落ちる

（14）春もたけなわですね。

（12）は明示された「太郎が来た」という情報以外に、太郎と同類と想定される人が来たことを述べる同類性を表す用法であり、（13）は明示された「猿」のように木から落ちにくいものも、木から落ちることがあるという意外性を表す用法である。この二つの用法は他の言語にも対応する言語表現が容易に見つかる。例えば英語では、同類性を表す用法の場合は’‘also’‘too’が担い、意外性を表す用法の場合は‘even’が担う。しかし、（14）のような「も」の用法は他の言語に対応するも

のがない場合が多く、先行研究でも長く問題にあげられてきたものである。ここでは、どのような議論が日本語学でされてきたか先行研究を見ていきたい。

従来（15）（16）のような「も」の用法は、寺村（1991）[7]では「詠嘆」、沼田（1986）[8]では「柔らげ」と呼ばれ、野田（1995）[9]でも「柔らげ」が使われ、沼田（1995）[10]では「他者不定肯定」と変更された名称がつけられて、文法的な範疇化を困難にするものの一つであった。

（15）　君もなかなかやるな。

（16）　夏も終わりですね。

「詠嘆」という言葉が表す意味は、森重（1971：P. 177）[11]が「「現実性判断」には現実への情意ー詠嘆の意味が濃厚になる」と述べているように、現実性に関わる感嘆型の文として分析するべきだが、野田（1995）[12]がこの種の「も」を「現場依存の視点」をとりやすいものに立つ傾向にあるものと位置づけている以外は、この観点から考察されたことはない。

寺村（1991：PP. 91-92）[13]は、（17）から（19）のような例をあげて、「「詠嘆」という言葉以外には適当な言い表しかたがないような情緒的な効果である」と述べているが、その「詠嘆」という意味が、どのように生み出されたのかという説明はない。

（17）「その財布もずいぶん古くなりましたね」保之助は懐かしそうに云った、「ずいぶん昔からおねだりするたびに見るんですが、いつごろお作りになったものなんですか」
「たぶん娘じぶんでしょう。もう忘れてしまいましたよ」（山本周五郎「栄花物語」）

（18）「用助どんも、老いたな」と、継之助はいった。（司馬遼太郎「菜の花の沖」）

（19）「おまえも因果な人だねえ。なにも他人の女房に眼をつけることはあるまいにね」
（松本清張）

田野村（1991：PP. 84-85）[14]は、寺村（1991）の例に対して次のような解釈を与えている。

（17）’（長イアイダキレイダッタ）その財布もずいぶん古くなりましたね。

（18）’（若イ若イトオモッテイタ）用助どんも、老いたな。

（19）’（ソンナコトヲスルトハ思ッテイモミナカッタ）おまえも因果な人だねえ。

そして、「「君もしつこいな」や「あなたも人が悪いな」という文についても、「も」の働きは一見はっきりしないが、話し手は、相手がしつこいとか人が悪いなどとは予想もしていなかったのに、そのように思わざるを得ない事態を認識したということを、「も」によって表現しているものと思われる」と結論づけている。

定延（1995：P. 234）[15]は、このような用法を、通念の「も」と呼び「問題となる心内の一般的抽象的知識は、色々のモの場合より更に具体的色彩を失っており、更にスキーマティックな、つまり、一般的抽象的な知識となっている。簡単にいえば、これは現実世界ではありがちな事態に関する通念に他ならない。話し手はこのような通念との類似に支えられて具体的な事態をモで表現できる」と、「知識のまとめ上げ」という心的プロセスによって説明している。興味深いことに、問題となっている「も」の一用法について、田野村（1991）は、「予想もしていなかったこと」、定延（1995）では、「通念に類似すること」と解釈されており、両者は一見相反する解釈を与えているようにも思われる。

田野村（1991）、定延（1995）の指摘は、一見全く異なった解釈と考えられるが、二つの解釈が両立する場合もある。（18）の例は、次のような解釈をもつと考えられる。

（18）”（若イ若イトオモッテイタ）用助どんも、（時間の経過とともに人が老いていくように、やはり）老いたな。

(18)”のように、二つの解釈が両立する場合は、通念として、世の中にそういうことが起こることは常ではあると認識していたにもかかわらず、実際に今問題となっている対象に、そういうことが起こるとは、考えられなかった、考えてもみなかったというような感情が表現されているのではないだろうか。このように、常識や通念で予測されることでありながら、それが、ある対象において真となる時、人はしばしばその命題を、改めてある種の驚きにも似た感慨や諦観をもって受け止める。詠嘆の「も」は、「ある種の驚き」と「通念との類似」が同時に表現されている用法と考えることもできるのである。

澤田（2007：PP.27-42）[16]は、いわゆる詠嘆の「も」に関して、次のように分析する。

(15)　君もなかなかやるな。

(16)　夏も終わりですね。

(17)　その財布もずいぶん古くなりましたね。

(18)　用助どんも、老いたな。

(19)　おまえも因果な人だねえ。

(15)のようなタイプの文は、日常的によく使用される。「おまえも馬鹿だな」、「私も年だわ」「おまえもしつこいな」というような文である。(18)(19)もこのタイプといえるだろう。ここでは、属性付与タイプと呼ぶ。このようなタイプの「も」の直前の名詞句は、通常発話時に発話の場にいる人や話し手自身を指示することが多く、述語はその指示対象の属性である場合である。その属性は、発話時に話し手が認識した出来事から新しく発見したものである。話し手は、直接経験か、もしくは詳しい話を聞かされたり、ビデオを見たりして直接経験判断が可能な状況で、出来事を認識し、属性付与の判断を発話時にしているのである。(18)は発話時に「用助どん」はいないかもしれないが、話し手は、対象が「老いた」という属性をもったと感じ取るような出来事を認識した後の発話であろう。発話時に発見したということは、発話時以前はその属性をもつ対象として認識していなかったのであり、話し手は赤塚(1998：P.31)[17]が「発話の場で初めて話し手の意識のなかに入った情報は、たとえ話し手がその場で真と信じていても、その瞬間には非事実である」と表現する状態であったと考えられる。つまり真となったことに、ある種の驚きの念を表現しているのである。そして、世の中にいる同じ属性をもった人のカテゴリーに累加し、その人達と同類であると表現している。ここでもある種の意外性と同類性が表されている。

(16)の「夏も終わりですね」は環境の変化を表す文で、このタイプも日常的によく使用される。「春もたけなわですね」「年も押し迫ってきましたね」「秋も深まってまいりました」「夜も更けてまいりました」などが、このタイプに含まれる。このタイプをここでは状態変化タイプと呼ぶ。このタイプは、話し手の発話時の環境を表すため、属性付与タイプと異なり、挨拶文や発話の切り出しなどに多く使用され、聞き手と共有できる話題として役立てられる。明示された命題が真となることから、想起される他の様々な事象の成立が「も」の同類性により含意される。たとえば、「春もたけなわとなりましたが、･･･」ではじまる挨拶文は、この命題成立とともに「桜の花が満開である」「あたかかくなった」などの命題も成立したことを含意して、聞き手との共通認識に支えられて、環境が変化したことを表現できる。この場合は、事態の同類性が表現されていると解釈できる。しかし、「夏も終わりか」「春もたけなわだなあ」などと、単文であらためて、環境の変化について述べられた場合は、詠嘆の解釈をとることができる。状態変化のタイプの場合、「も」の直前の名詞句は、ある期間の長さを示すため、その期間の初めと終わりでは属性が異なる。たとえば、春のはじめと春のたけなわは、異なった属性を持ち、夏の盛りと夏の終わりもまた異なった属性をもつ。「も」

の直前の名詞句が異なった属性をもったと、話し手が認識した時に発話されるのである。この場合も発話時以前は非事実であったことが、真となった時、ある種の感慨を表現していると考えられる。ある種の感慨には、明示された時期を迎える話し手の発話時以前の期待や予測によって、様々なものがあるだろう。たとえば、明示された時期は一体いつになったら、来るのだろうかと待ちわびていた場合には、感動に似た感情であろうし、事情によりその時期を迎えることが、なかなか想像できなかった場合は、安堵に似た感情であろう。いずれにしても、発話時以前のなんらかの期待や予測を反映し、それが現実となったことへの発話時の感情が表現されていると考えられ、ある種の意外性が含まれた感情といえるのである。

(17)の「その財布もずいぶん古くなりましたね」というタイプは、人や物といったものの属性変化を表現したものである。自分の子どもや知り合いの子どもについて「X も大きくなったね」などと言う場合である。たとえ、いつも変化を観察しているものであっても、ある時期それまでとは異なった段階に入ったと感じる時がある。それが表現されているのが、このタイプの文である。このタイプを属性変化タイプと呼ぶ。属性変化タイプは、詠嘆の解釈ができる状態変化タイプとほとんど同様の感慨の表出と考えてよいだろう。人やものが時間の経過とともに持ちえる属性を対象が持ったとき、その属性をもつ他の人達と同類であることが表現される。発話時以前のある時期には、その属性を持ちえることを期待・予測すらできなかった時期もあるかもしれない。そのような気持ちに対し、真としてその属性が成立すると感じたことから引き起こされる感情が表現されている。

このように、属性付与、状態変化、属性変化の３つのタイプのいずれの場合も同類性の解釈は可能である。また、「も」が使用される文末のモダリティや発話環境の条件が整うと、発話時に真となった命題への発話時以前の期待や予測が反映されるある種の意外性(詠嘆性)の解釈が可能となる。すなわち、いずれのタイプも同類性や意外性が表現されている「も」の用法と連続的であることがわかる。このような分析のもと、澤田（2007）は、発話時に真となった命題への驚きに似た様々な感情を「詠嘆性」と呼び、属性付与、状態変化（詠嘆性の解釈ができる場合)、属性変化の３つのタイプに次のような２つの特徴が共通していることを指摘した。

① 述語は、「も」の直前の名詞句の属性または状態変化を含めた属性変化と解釈できる。
② 話し手は、発話時に当該事態を直接経験あるいは直接経験判断をすることが可能であり、話し手にとって非事実であったことが、真となった時に発話されている。

このように澤田(2007)においては、発話時の話し手の心的な状態については考察されているが、コミュニケーション上でどのような効果を狙って使用しているかについては考察していなかった。

中尾（2008:P.51）[18]は詠嘆の「も」とされていた用法に対して、「並列事態が想定しにくいモ」として統一的な説明を与えることはできないという立場に立ち、(20)のような用法を「典型例表示のモ」、(21)のような用法を「潜在的意識活性化のモ」、(22)のような用法を「解釈のモ」として分類している。

(20)春もたけなわの今日この頃です。
(21)夏休みもあと３日となった。
(22)日本語教育の仕事も奥が深いわねぇ

そして(20)のような「典型例表示」の「も」には情意性はなく、「潜在的意識活性化のモ」には「感慨」、「解釈のモ」には「感応」という情意があるとされている。しかし中尾（2008）もまた話

し手の情動について「情意性なし」「感慨」「感応」と分析し分類しているが、話し手がどのような意図を狙っているのかというコミュニケーションにおける働きについては述べていない。

沼田(2009:P.131)[19]では、(23)(24)といった例をあげて「他者」が不定となる一つの用法として「不定用法」と呼んでいる。また「談話の視点から考えると、その文で明示的に述べられている事柄を積極的に相手に伝えようとするのではなく、その後に続く文を発話するためのいわば背景づくりをするような機能を果たすものであることが多い」と述べている。

(23)春もたけなわになりましたが、その後、お変わりありませんか。

(24)夜もふけて参りましたので、そろそろこの辺でお開きにしたいと思います。

このように澤田(2007)は「も」を使用した発話時の話し手の心的状態について、中尾(2008)は、文法上の機能について、考察しているが、コミュニケーション上でどのような効果を狙って使用しているかについては指摘されていない。沼田(2009)においても談話における「背景づくり」の機能とされているだけで充分な考察はない。

そこで本稿では、協調的なコミュニケーションを目指す話し手が、どのような効果を狙っているかに焦点を絞り考察を試みる。

(14) 春もたけなわですね。

(18) 用助どんも、老いたな。

(25) 夏も終わりか。

(26) 太郎も大きくなったなぁ。

(14) (25)のように、話し手の「今ここ」の季節についての表現は、日本に来たばかりで日本の季節について知らないであろう人には使えない。話し手の伝えたい「今ここ」の環境、言明している季節に達したことを理解できる人にしか使えないという特徴をもつ。また(26)の表現もまた、太郎という子どもに初めて会った人には使えない。言明されている存在が、時間の流れのなかで変化してきたことを、同じ空間のなかで確認してきた聞き手としか使えないのである。(18)のような発話の「今ここ」で属性を付与するタイプのものについては、聞き手に対する共感はあるが、「おまえも馬鹿だな」などの発話に見られるように複雑な情感が込められており、必ずしも協調的コミュニケーションを目指している場合だけではないが、初対面の相手ではなく何らかの過去を共有している聞き手に向けて発せられたものであることが多いであろう。すなわち属性付与のタイプは複雑な感情の表出である場合が多く、話し手は協調的コミュニケーションを志向している場合ばかりではない。しかし(14)のような状態変化タイプと(26)のような属性変化のタイプにおいては、対象が時間の経過によって変化する。その変化は社会的文化的歴史的環境を共有する聞き手であれば、期待・予測されるものであり、話し手が発話時にその変化を見いだし、聞き手にその変化について詠嘆を込めて発話しているといえる。この期待・予測されるイメージであるということが重要であり、発話時に話し手のなかにあったイメージが話し手の「今ここ」に現れたということにより、驚きだけではない感情が立ち上るのである。それは安堵や感激、またあきらめに似た諦観のような感情かもしれない。つまり、詠嘆という感情は、話し手の知識によって、時間の経過のなかで現れると期待・予測されたあるイメージを含みもっており、それが話し手の「今ここ」のイメージと一致したということを表しているのである。しかもそのイメージが聞き手にも共有されているという思いも同時にある。３で述べたように、このような同じ時代同じ空間を生きる者同士がもつと考えられるイメージは俳句や絵画でも重要なものであったが、岸田劉生(1979:P.129)[20]もまた次のように述べる。

事象の美とは結局「人生」又は「現実」、「人間の生存」等の事に何等かの交渉がない時には起こり得ない感情である。即ち如実、迫真という事は、即ち「あ、これだ」、「この通りだ」という、日常見るもの聞くものが再現され、再び見せられた時の喜びであって、その感情の中には、自己とその再現せられた対象との生存上の共在感、交渉的経験感があるから、其処に、愛、ユーモラス、不思議等の感じが湧くのである。

要するに、話し手と聞き手は「今ここ」の時空間への知覚を共有することが可能で、目の前の対象を過去にも知覚したことがある記憶から「あ、これだ」と再確認することができる。風景や季節などの場合は実際に一緒に知覚したものでなくても同様の風景や季節を知覚したことがあるであろうという前提のもとに発話の効果として共在感覚を呼び起こし、連帯感をもつことができる。ゆえに、太郎を初めて見た人に「太郎も大きくなったなぁ」と情意をもって話しかけることはできないし、初めて日本に来て間もない人に、その人がたとえ日本語が流暢であっても「春もたけなわになりましたねぇ」と話しかけようとは思わないだろう。いわゆる詠嘆と言われてきた「も」には、発話時の「今ここ」のみならず、記憶の中の共在感覚を呼び起こさせる効果があり、それによって聞き手との協調的なコミュニケーションの方向性を持つ社会的関係性を維持していきたいと意図することができる。

「宴もたけなわとなってまいりましたが、ここで伊藤さんにスピーチをお願いしたいと思います」といった発話もこの宴席にいる人たちが同じ空間で同じ時間を過ごしてきたという共在感覚を呼び起こし強化する効果を狙うことができる発話だといえよう。

つまり、この用法は話し手が、聞き手も過去において同じ対象や環境を確認したであろうと期待・予測できる前提が必要となる。話し手と聞き手は、同じ空間に存在し、現前の状況を、今確認しあえるが、過去においても対象を認知できたであろう聞き手にしか使えないのである。この用法は、話し手が聞き手に対して、「共在感覚」を喚起させているだけでなく、記憶を思い起させ、時間軸のなかで今と過去を繋ぎ、聞き手との「共在感覚」をさらに強化しようとする用法であると指摘できる。話し手は聞き手にとっても「今ここ」の出来事について描写し、発話しているので、聞き手にとっても情報としてはほとんど価値のないものである。話し手は目の前の出来事について情感をもって発話し、聞き手も同感し、過去にも見ていたことを思い起こしてくれないかと期待している。寺村（前掲）の(17)においても保之助はその財布をずいぶん昔からおねだりするたびに見たと述べている。つまり話し手と聞き手は今だけではなく、過去においても財布を見てきた時間を共有しているのである。

(17)「その財布もずいぶん古くなりましたね」保之助は懐かしそうに云った、「ずいぶん昔からおねだりするたびに見るんですが、いつごろお作りになったものなんですか」
「たぶん娘じぶんでしょう。もう忘れてしまいましたよ」（山本周五郎「栄花物語」）

Gibson, James Jerome と同様に、Ecologically oriented cognitive psychology の見地から考察する Neisser, U (1988:PP.545-560)[21]は、「記憶のもっとも根源的で本質的な機能とは、個人的に経験した過去の再現ではなく、家族や友人と社会的関係性を創造し、それを維持することにある」と述べている。まさに、このような「も」の一用法を使用する話し手は聞き手に「対象物を過去からお互いに知っていて、その変化をともに観察してきて、今ここに一緒にいる」と伝え、協調的なコミュニケーションを目指し、社会的関係性を維持しようとするものであると考えられる。この「も」の用法は、挨拶語同

様に、話し手は聞き手も同意してくれると期待しているので、同意してもらえない場合は(27)のように、少し気まずい会話となる。

(27) A:　夏も終わりですねぇ。

B:　そう？　結構暑いけど。

さて、詠嘆の「も」と呼ばれてきた用法は、独り言でなく発せられた場合は、話し手が見つめる「今ここ」にあるものや状況を、聞き手もまた見ている必要があった。聞き手は、話し手の意図を推察するために話し手が「見ている」方向を自分も見ようとする。この行為は、心理学においては共同注意(joint attention)と呼ばれるものである。つまり、詠嘆の「も」は共同注意を他者に促して、聞き手に共感を求めていると説明できるだろう。しかしながら、その文脈で聞き手が受け取る意味は、千差万別で話し手と聞き手が生きてきた歴史や社会的文脈で異なるのである。

また詠嘆の「も」が独り言で発せられた場合は、話し手は「も」の直前の名詞句と共に過ごした日々を思い起こしていると考えられる。(28)のように「も」の直前の名詞句が人や動物であった場合は、その人や動物と共に生きた日々、(29)のように季節の場合は、その季節のなかで生きた日々、(30)のようにモノの場合は、そのモノと共に過ごした日々が話し手の脳裏に思い起こされると考察する。人が自然やモノから受容する情報については、澤田(2020)で詳述しているが、独り言についての深い考察は今後の課題としたい。

(28)マリーも大人になったなぁ。

(29)夏も終わりかぁ。

(30)この傘も壊れたか。

５．おわりに

本稿では、「私は今この人とともに何かをしている」という感覚を、「共在感覚」と呼び、この感覚を呼び起こすような現代日本語の言葉を中心に分析を試みた。具体的には、挨拶語と、日本語学においてもまだ完全に解き明かされていない詠嘆の「も」と呼ばれる表現に着目してきた。この表現は、話し手が協調的なコミュニケーションを望む聞き手に対して、話し手と聞き手が共有する環境への知覚をコミュニケーションの基盤として共在感覚を聞き手に意識化させようと意図する表現であることを指摘した。

日本語を日本で使用する人々の間で、「今日はいい天気ですね」などと天気や気候を話材にして挨拶をする人々は、環境に対して同じ感覚をもっているであろうということを基盤にして、協調的なコミュニケーションを志向している。また詠嘆の「も」の中でも「太郎も大きくなったね」などの用法は、話し手は聞き手に対して、「今ここ」をともに過ごしているという「共在感覚」を喚起させているだけでなく、過去においても「ともに過ごしていた」ことを、思い起させ、時間軸のなかで今と過去を繋ぎ、聞き手との「共在感覚」を強化しようとする用法であった。このような過去における共在感覚を呼び起こし、協調的コミュニケーションを志向する事例は「先日はありがとうございました」のような挨拶語にも現れる。日本において日本語を使う社会では、飲み会などで上司や先輩、先生などに奢ってもらった場合は、次に会ったときに、「昨日はありがとうございました」や「先日はありがとうございました」などの挨拶を言わなければならない。日本語がかなりできる留学生でもこのような挨拶の文化を知らなかった渡日して間もない頃、この挨拶を言わなかったことで気まずい関係になったということをよく聞く。欧米語や中国語ではこのような挨拶はむしろ「また奢ってほしい」という含意がでるために、このような挨拶は使われない。使用・不使用と現れる

事例は真逆だが、発話時の現在や、過去における共在感覚を意識するということは日本語のみならず、他の言語文化においても見られる現象であると考える。

本稿では、こういった言語の使い方の基盤にあるコミュニケーションのあり方が、Ecological Approach をとる Gibson, James Jerome や Neisser, U.などの視点から普遍性を求めることができ、日本語だけの特別なものではないことを指摘した。Gibson の Ecological Approach は動物の活動を動物とそれを取り囲んでいる環境との相互関係で捉えたものである。高度科学技術社会が新局面を迎えた現在、テレワーク、遠隔診療、バーチャルなゲームなどが普及し、人が同じ時空間にいなくてもコミュニケーションすることが可能となる時代が到来している。本稿で考察した人が同じ時空間に存在してこそ、醸し出される意味とその解釈は、身体を伴うコミュニケーションの考察と考えることもできる。同じ時空間に存在し、身体を伴うコミュニケーションは人間の原初的な側面に働きかけるものであるかもしれない。人間もまた地球上に住む動物の一種であることを忘れず、人間にとってのコミュニケーションの意味を問い続ける必要性を今強く感じている。

また日本語を日本で使用する人々の多くが今なお環境への知覚の共感を基盤とし、協調的なコミュニケーションへ向かおうとする根底には、日本における環境すなわち自然への伝統的な思想が影響している可能性は高いが、検証にまでは至らず、この点に関しては今後の課題としたい。

注

[1] 木村大治「ボンガンドにおける共在感覚」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館書店，東京，1996

[2] 比嘉正範「あいさつとあいさつ言葉」『日本語学』vol.4 明治書院，京都，1985

[3] 氏家洋子「日本社会の出会い・別れのあいさつ行動―ソトの人との生産的コミュニケーションへ」『国文学』第 44 巻 6 号　學燈社，東京，1999

[4] Gibson, James Jerome, *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin,1979
（J.J.ギブソン，『生態学的視覚論』, 古崎敬他訳, サイエンス社，東京，1985）

[5] Gibson, James Jerome, “Note on Affordances” Reasons for Realism; Selected Essays of James J. Gibson, ed. By Reed, Edward and Rebecca Jones, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, 401-418. 198）
（「アフォーダンスに関する覚え書き」境敦史訳『ギブソン心理学論集　直接知覚論の論拠』勁草書房，東京，337−369，2004, ）

[6] 佐伯胖『共感　育ちあう保育のなかで』ミネルヴァ書房，京都，2007

[7] 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版，東京，1991

[8] 沼田善子「とりたて詞」奥津敬一郎、沼田善子、杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』pp. 105−226，凡人社，東京，1986

[9] 野田尚史「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題と取りたて』くろしお出版，東京，1−35，1995

[10] 沼田善子「『も』―とりたて詞とその周辺―」つくば言語文化フォーラム『「も」の言語学』ひつじ書房，東京，13-76，1995

[11] 森重　敏『日本文法の諸問題』笠間書店，東京，1971

[12] 野田尚史「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題と取りたて』くろしお出版，東京，1-35，1995

[13] 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版，東京，1991

[14] 田野村忠温「「も」の一用法についての覚書―「君もしつこいな」という言い方の位置づけ―」『日本語学』10-9，明治書院，東京，80-86，1991

[15] 定延利之「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志、野田尚史、沼田善子編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版，東京，227-260，1995
＊「色々のモ」は定延の用語で、言表事態に類似する事態の存在を匂わせはするが、我々はその類似事態が具体的にどういう事態なのか特定できないものとされている。

[16] 澤田美恵子『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版，東京，2007

[17] 赤塚紀子「条件文と Desirability の仮説」赤塚紀子・坪本篤朗著『モダリティと発話行為』, 研究社，東京，2-97，1998

[18] 中尾有岐「並列事態が想定しにくいモについて」　『日本語文法』8 巻 1 号 日本文法学会，東京，36-52，2008

[19] 沼田善子『現代日本語とりたて詞の研究』 ひつじ書房，東京，2009

[20] 岸田劉生『岸田劉生全集第四巻』岩波書店，東京，1979

[21] Neisser, U. “Time present and time past.” *Practical Aspects of Memory: Current Research and Issues. Vol.1,* ed. Gruneberg, M.M. Morris, P.E. and Sykes, R.N. John Wiley and Sons, Chichester. 545-560.1988.

参考文献

Gibson, James Jerome, *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin,1979
（J.J.ギブソン，『生態学的視覚論』，古崎敬他訳，サイエンス社，東京，1985）

Gibson, James Jerome, “Note on Affordances” Reasons for Realism; Selected Essays of James J. Gibson, ed. By Reed, Edward and Rebecca Jones, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, 401-418. 198)
（「アフォーダンスに関する覚え書き」境敦史訳『ギブソン心理学論集　直接知覚論の論拠』勁草書房，東京，337-369，2004,

Neisser, U. “Time present and time past.” *Practical Aspects of Memory: Current Research and Issues. Vol.1,* ed. Gruneberg, M.M. Morris, P.E. and Sykes, R.N. John Wiley and Sons, Chichester. 545-560.1988.

赤塚紀子「条件文と Desirability の仮説」赤塚紀子・坪本篤朗著『モダリティと発話行為』研究社，東京，2-97，1998
伊藤徹『芸術家たちの精神史　日本近代化を巡る哲学』ナカニシヤ出版，京都，2015
比嘉正範「あいさつとあいさつ言葉」『日本語学』vol.4 明治書院，京都，1985
本多啓『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会，東京，2006
氏家洋子「日本社会の出会い・別れのあいさつ行動―ソトの人との生産的コミュニケーションへ」『国文学』第 44 巻 6 号 學燈社，東京，1999
木村大治「ボンガンドにおける共在感覚」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館書店，東京，1996
岸田劉生『岸田劉生全集第四巻』岩波書店，東京，1979
河野哲也『エコロジカル・セルフ』ナカニシヤ出版，京都，2011
寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版，東京，1991
中尾有岐「並列事態が想定しにくいモについて」『日本語文法』8 巻 1 号 日本文法学会，東京，36-52，2008
佐伯胖『共感　育ちあう保育のなかで』ミネルヴァ書房，京都，2007
坂原　茂「“さえ”の語用論的考察」『談話行動のモデル化に関する認知科学的研究』昭和 60 年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書，48-80，1986
定延利之「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志、野田尚史、沼田善子編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版，東京，227-260，1995
澤田美恵子『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版，東京，2007
澤田美恵子「工芸という文化―自然とモノからの情報の受容」『社藝堂』7 号 社会芸術学会，京都，91-116，2020
田窪行則・金水敏「複数の心的領域による談話管理」坂原茂編『認知言語学の発展』ひつじ書房，東京，251-280，2000
田野村忠温「「も」の一用法についての覚書―「君もしつこいな」という言い方の位置づけ―」『日本語学』10-9，明治書院，東京，80-86，1991
寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版，東京，1991
沼田善子「とりたて詞」奥津敬一郎、沼田善子、杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社，東京，105-226，1986
沼田善子「『も』―とりたて詞とその周辺―」つくば言語文化フォーラム『「も」の言語学』ひつじ書房，東京，13-76，1995
沼田善子『現代日本語とりたて詞の研究』 ひつじ書房，東京，2009
野田尚史「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題と取りたて』くろしお出版，東京，1-35，1995
森重　敏『日本文法の諸問題』笠間書店，東京，1971

The Ecological Approach to the Particle ‘Mo’ and Greetings in Japanese

Summary

In this article, I will refer to the situation, “I am doing something with this person now,” as the “mode of co-presence”, and attempt an analysis on time and space where the “mode of co-presence” is felt while using words from contemporary Japanese language as clues that may arouse this feeling. When we observe the Japanese particle ‘Mo’ and Japanese greetings, there are expressions which confirm the existence of the “mode of co-presence” in the past and those which seem to indicate that it exists in time and space of the present. These “modes of co-presence” can also exclude others while at the same time they can reinforce a community. I also describe a way of communication that underlies the use of such language that can seek universality from the perspective of Gibson, James Jerome who takes the ecological approach.

Key words:

Japanese particle‘Mo’, Japanese Greetings, Mode of co-presence, Cognitive linguistics, Ecological approach